

# 「正保城絵図」と「出雲国松江城絵図」に関する考察

和田嘉宥・稲田 信

## 1. はじめに

本誌別稿「初期松江城天守の形態に関する試論」では、『千鳥破風』が描かれるなど現在の天守と異なる外観をもつ天守図、『出雲国松江城絵図（正保城絵図）』（正保年間：1644-47）」は、「初期の天守の姿を描写したものである可能性が強いと考えられる」とし、また「幕府収納図である『出雲国松江城絵図（正保城絵図）』には松江藩家老乙部家に伝わって『控図』とされてきた『松江城正保年間絵図』があり、同じく『千鳥破風』が描かれるなど現在の天守と異なる外観をもつ天守が描かれている。今後の検討を要するが、この乙部家伝来の『松江城正保年間絵図』は、『出雲国松江城絵図（正保城絵図）』より松江城・城下町の実態に即して描かれた絵図の可能性が強く、『出雲国松江城絵図（正保城絵図）』の元図（下図）、あるいはその写しとなるものだろう。」と記した。また、『正保城絵図』は城下全体を描いた城下絵図である。『天守がどこまで正確に描かれた』かについては、今後、さらなる検討が必要であるが、『城絵図』と表記されていることに併せて、城郭部分が大きく描かれている。」とも記した。

本稿では、国立公文書館が所蔵するいわゆる「正保城絵図」に描かれている天守の姿図と、その一つである「出雲国松江絵図」、及びその元図（下図）あるいは元図（下図）の写しと見られる「松江城正保年間絵図」（乙部正人氏所有、松江歴史館蔵）を紹介し、これらの「絵図」の描写内容について検討及び考察を加えようとするものである。

## 2. 「正保城絵図」について

「正保城絵図」は、正保元年（1644）12月の幕命により、全国の藩が調製し、提出した城絵図（あるいは城下町の地図）で、文化14年（1817）には、157点の城絵図（正保城絵図）があったことが記録されているが<sup>(1)</sup>、国立公文書館に保存されている「正保城絵図」は63点（国立公文書館デジタルアーカイブでは62点が閲覧可能<sup>(2)</sup>）で、現在、重要文化財（歴史資料）に指定されている。

これら「正保城絵図」は、城郭内の櫓や天守などの建物が描かれ、城郭周辺では石垣の高さ、堀の中や深さ、長さなどが具体的に記されているほか、城下の街区割、山川の位置や形が詳細に描かれており、城下の全容を把握することができるものである。

幕府が藩に求めた「正保城絵図」の調整であるが、例えば、佐賀藩の「多久家有之候御書類之写」の「城之絵図之事」（佐賀県立図書館蔵<sup>(3)</sup>）には、

一、本、二、三丸間数之事

右、本、二、三丸之間目、石垣土手之間目、同高サ、塀之高さ間目、やくら等迄不残絵図ニ書付可申由候事

付、かへら塀板塀之分ケ書付可申由之事

一、堀のふかさひろさの事

右、小城之廻之堀、そこそこにでふかさひろさヲ、ごまかに書付可申由之事

一、天守之事

天守ヲ絵ニ書、いくかいと有之儀、并垣之高さ有所迄、無相違様ニ絵図可仕由候事

一、惣曲輪、堀之ひろさふかさ之事

惣構之堀そこそこにて、ひろさふかさ書付可申由候事

一、城より地形高所有之は、高所と城との間、間数書付可申事

但、惣構より外ニ高所有之共、書付候事

右は如書面にて御座候事

一、侍町小路割并間数之事

侍町、小路割ヲ仕、小路々々の長さの間目書付可申由之事

一、町屋、右同断之事

通町、脇町迄絵図ニ書付、壱町々々之しるし可仕由候事

一、山城、平城書様之事

平城にて候へハ、書様と有之儀無御座候事

と記されており、城下の全容が城郭に至るまでよく分かるように描くことが求められていた。

このように、「正保城絵図」は幕府より一定の基準が求められ、描かれたことが知られているが、「国立公文書館デジタルアーカイブ」で閲覧できる城絵図を見ると、上記の他にも次のような類似点が確認できる。

- ・城下の周辺には山や川に田畑が描かれて、田畑には浅田、深田、畠などの表記がある。
- ・城下内の道や街区や橋は描かれているが、街区内の屋敷割は描かれておらず、街区には侍屋敷（侍町）、足軽町、町屋、寺などの表記が見られる。
- ・城下内の往来可能な道には朱線が引かれているが、その内、江戸に通じる本道（街道）から城に至る主往還道は朱線が太くなっている。また道にはその長さも表記されている。主要な橋にも長さが記されている。
- ・城郭周辺の堀や川については、その深さ、巾、長さが記されている。
- ・堀際は石垣か堤（土手）か、その仕様が区別して描かれている。

矢守一彦は論文「概説 正保城絵図」において、「『正保城絵図』が（中略）これを見る者に〈画一的〉な印象を与えるのは、単に幕府の統一的な作製基準に則っているのみでなく、清絵図を制するにあたってほとんどの場合、幕府御用の狩野派絵師の筆を煩わせているからである。」と記している<sup>(4)</sup>。

個々の城絵図を見ると、例えば、内題の記されている図が多いが、内題のないものもある。また、内題の表記も「城絵図」を入れる図が多いが、これにも各藩による違いが見られる。また、個々の図をよく見ると、描き方にも微妙に差異が認められる。冒頭にも記したように、「正保城絵図」は幕命によって全国の藩が（幕府の指示に従って）個々に調製して描いたものと見るのが妥当と思われる。

なお、「正保城絵図」の特徴としては、城下全体が描かれているものの、内題に「城」（城絵図、城之絵図）を含むものが大半であるように、城下における城郭部の位置が一目でよく分かるように描かれていることである。「正保城絵図」は、「島原の乱」後、徳川家光の治世下に、幕府が各藩における城郭の軍事性を完全に把握することで、幕府の絶対的な権威を諸大名にはっきり認識させる意味を持たせるものであったのは間違いないだろう。

### 3. 「正保城絵図」に描かれている31天守

国立公文書館デジタルアーカイブで閲覧可能な「正保城絵図」は62点あり、その内、天守が描かれているものは31点である。これら31点について、図の向き（北の方角）、図面の大きさ、内題の書かれている位置、天守の向き、天守の描写内容等をまとめたのが表1である。また、天守部分を「正保城絵図」から抽出してまとめたのが図1の①～⑳である。

これらの絵図の大きさの平均値は左右262cm、上下242cmであるが、個々にみると左右171cm～365cm、上下137cm～296cmとまばらで、定まった大きさは確認できない。内題の記されている図は31点中24点で、その位置は左下が17点と最も多いが、表記は絵図によって異なる。「正保城絵図」は城下とその周辺を描いた城下町図ではあるが、城郭部がより詳しく描かれ、城への道程も分かりやすく描かれている。「正保城絵図」は、その名称（内題）からも城郭部に主点が置かれて描かれたものであることは間違いないだろう。

天守（あるいは天守と見える矢倉）が描かれている図31点について、全体図を見ると、北を上にした図が9点、北を下にする図が9点、北を右にする図が5点、北を左にする図が3点、左上を北にする図が2点、左下を北にする図が1点で、北を上にする図と北を下にする図が9点ずつと多い。

天守の向きは、上向き14点、下向き6点、左向き5点、右向き2点、左上向き、右上向き、左下向き、右下向き各1点ずつである。

天守の形態を見ると、31天守の内27天守が層塔型天守として描かれており、5天守は望楼型天守として描かれている。

「正保城絵図」は幕命により、各藩が調整したものであるが、城郭部や天守の形態は総体的に見て、出来るだけ忠実に描こうとしたものと見られ、31天守をそれぞれ見ると、描き方には差異が見られるし、松江城天守⑳は他の図に比べて丁寧にかつ詳細に描かれているのが分かる。

天守図を実物、古写真、指図等との比較で見よう。白河城天守①は破風が多く描かれている。古河城天守③はほぼ正確。丸岡城天守⑦は形状が異なる。福知山城天守⑬は層塔型で形状が異なる。亀山城天守⑭はほぼ正確。岡山城天守⑯はほぼ正確であるが外壁が白塗。備中松山城⑰はほぼ正確。津山城天守⑱はほぼ正確。松江城天守⑳は層塔型で破風が多い。丸亀城天守㉑はほぼ正確。大洲城天守㉒は形状が異なる。土佐（高知）城㉓は形状が異なる。

「正保城絵図」に描かれている天守の姿は、実在した（する）天守と類似しているものも少なくないが、明らかに形態の異なるものも見られる。ちなみに、「正保城絵図」の松江城天守⑳は、層塔型五重の天守として描かれており、二重目や三重目には千鳥破風が、四重目には唐破風が描かれており、現状の望楼型四重の天守とは異なる描写になっている。

ここでは、「正保城絵図」に描かれている31天守の天守部分を抽出した図を掲載することに留めるが、個々の図に描かれている天守や城郭の様相はそれぞれ異なっている。城郭内の曲輪の描き方は、これをもって「正保城絵図」が、当時の城郭の構造形態を正確に描写しているとは言い難い面も見られるが、本丸、二之丸、三之丸といった曲輪の配置構造はほぼ正確に表現されている。「正保城絵図」は、天守の描写に限って言えば、その正確さには疑問があるものの、絵図の性格上、当時の天守の形状を、分かりやすく描写していると思なしてよいだろう。

#### 4. 「出雲国松江城絵図」（正保城絵図の一）と「松江城正保年間絵図」について

「出雲国松江城絵図」（図2-1）は国立公文書館に所蔵されている「正保城絵図」の一つであり、内題に「出雲国松江城 松平出羽守」とあることから、調整担当者は松平出羽守（直政）であることが分かる。「松江城正保年間絵図」（図3-1）は松江藩家老乙部家に伝わり松江歴史館に所蔵されている絵図である（以下、「出雲国松江城絵図」は「公文書館図」、「松江城正保年間絵図」は「乙部図」と記す）。2枚の図は極めて類似しており、「乙部図」は「公文書館図」の「控図」とされてきた。

2枚の図の違いの要所を述べる。

・街路にはともに朱線が引かれているが、「公文書館図」は、「江戸へ之本道」から「城郭部」に至る主

往還が太く引かれ、さらに「大手口」にも太い朱線が引かれている（「乙部図」には引かれていない）。

- ・「公文書館図」には本丸に設けられている「一ノ門」の正面にも「門」が描かれているが、「乙部図」にはない。（「公文書館図」に描かれた「一ノ門」の正面の「門」は実際には考えにくく、「乙部図」が正確に描かれていると言える。）

- ・末次町の東端を見ると、「公文書館図」には「侍町」の西に「堀」が描かれている。一方、「乙部図」には描かれておらず「町家」になっており、さらに、よく見ると、南部には橋を描いた痕跡が薄らと残り、その南に新たに道を描き、東西が繋がっている。（「松江城及城下古図」（天和3～元禄5：1683～92、三谷健司家蔵）以降の城下絵図では「堀」は埋まっており<sup>5)</sup>、「乙部図」は新しい情報で描かれている。）

- ・母衣町の東北端の三角地の南部を見ると、「乙部図」には、東側に「堀」が入り込んでいるが、「公文書館図」には描かれていない。（「松江城及城下古図」以降の城下絵図では「堀」が東西に貫通し、その途中である「乙部図」は新しい情報で描かれている）

- ・外中原の宍道湖添いをみると、道に添う細長い区画には「町家」があるが、「公文書館図」では区画が二分され、その間が湖面となっており、「乙部図」は、街区は一続きである。（「松江城及城下古図」以降の城下絵図では街区は一続きで、「乙部図」は新しい情報で描かれている。）

- ・橋梁を見ると、総体的に、「公文書館図」の方が「乙部図」より丁寧に描かれている。

- ・記載されている字句をよく見ると、「公文書館図」に記されている字句が、「乙部図」では記されていない箇所がいくつかあり、「公文館図」では（特に城郭内において）字句が追記されているようである。

- ・南田町の東端を見ると、「公文書館図」では、「侍町」と「よし原」の間に直線が引かれ、明確に区画されているが、「乙部図」では「侍屋敷」と「よし原」の間が明確になっていない。

- ・城郭部の櫓をよく見ると、「公文書館図」では大半の櫓や門の入母屋破風に懸魚が描かれているが、「乙部図」では入母屋破風の内の多くに懸魚が描かれていない。

- ・天守を見ると、五重の天守の形態はほぼ同じであるが、天守屋根に上がる鯨は、「公文書館図」では濃茶であるが、「乙部図」では着色されず輪郭だけである。また、天守屋根同様の鯨が、「公文書館図」では4階の破風や、附櫓の屋根にも描かれているが、「乙部図」には4階の破風や、附櫓の屋根には描かれていない。

以上から、全体的に見て、「公文書館図」の方が「乙部図」より丁寧に描かれており、記載されている字句も多い。これは、「公文書館図」が幕府に収納する城絵図として調製され清書された図面だからだろう。しかし、「公文書館図」は「堀」の一部などで「乙部図」より古い情報で描かれている。2枚の図の違いは制作年代を反映したものとも思われる。「公文書館図」には「一ノ門」の正面の「門」のように明らかな間違いも描かれている。

なお、「乙部図」では、末次町東の埋められた堀を詳しく見ると、書き直された痕跡が残る。また、「乙部図」には、末次町西端南側道路の描き方などのように張り合わせのズレをそのまま描いたように見える箇所があり、元々あった絵図（元図or下図）をそのまま書き写し、「堀」などは実態に合わせて修正を加えたように見える。

何れにしても、幕府提出用に調製された「公文書館図」（「出雲国松江城絵図（正保城絵図）」）とは別に、国元で制作された「乙部図」が存在することは看過できない。松江藩は藩で作成した元図（下図）を基に「公文書館図」を仕上げ、幕府に提出したと推察できる。

「乙部図」が元図（下図）あるいはその写しかどうかについては、明確にできないが、「公文書館図」に比べて記載されている字句が少ないこと、「堀」の一部は「公文書館図」より新しい情報で描かれていること、「公文書館図」にある「一ノ門」の正面の「門」を描いていないこと等から、「乙部図」は、「公

文書館図」の元図（下図）を基にしながらも、この図を描写する時、松江城と松江城下の実態に即して描かれた可能性が高いと見られる。

## 5. おわりに

本稿では、初期松江城天守の形態に関わる重要な史料ともなり得る「正保城絵図」について、まず、「正保城絵図」の制作意図について述べ、さらに天守が描かれている31図を取り上げ、天守の描写内容について検討を行い、また「正保城絵図」の一つである「出雲国松江城絵図」（「公文書館図」）と、「松江城正保年間絵図」（「乙部図」）を紹介し、その描写内容の相違について考察を加えた。

江戸幕府は、盤弱な基盤を構築する過程で、正保年間には全国の藩に対し、「国絵図」、「郷帳」、「城絵図」、「道程」等の提出を求め、幕府の求めに応じて藩が調製した城下絵図が「正保城絵図」である。その描き方が藩によって多少異なるのは、各藩で個々に制作された絵図であることを示しており、また、「正保城絵図」の性格から、城郭部を重視して描かれたものであることが分かってきた。

松江藩の場合は、藩で「元図（下図）」を描き、それを清書して提出したのが「出雲国松江城絵図」（「公文書館図」）であると思われる。元図（下図）の写しである可能性が高い「松江城正保年間絵図」（「乙部図」）の存在から、松江藩は「正保城絵図」の調整にあたって、城下の実測を行い、その制作過程で、元図（下図）を作成していたのは間違いないだろう。

ただ、「正保城絵図」は、城下全体の様子を幕府に提示するために制作されたものではあるが、城郭部並びに天守が、どこまで正確に描写されているかについては定かでない。

「出雲国松江城絵図」に描かれている城下並びに城郭部もどこまで正確に描かれているかについては、不確かな点もいくつか見られるが、徳川家光の治世下に松平直政が幕府に提出した絵図である。幕府の示した基準に基づき検分も受けた正保期の幕府収納図という性格からして、当時の城下の構造や城郭部の様子を、出来る限り正確に分りやすく描いた絵図であることは間違いない。「公文書館図」、「乙部図」は共に、城郭部の曲輪の構成に至るまで、当時の城下町の様子を実態に即して描写したものと見なしてよいだろう。

## 注

- (1) 矢守一彦1986「概説 正保城絵図について（上）（下）」『名城絵図集成（東日本之巻）、（西日本之巻）』小学館
  - (2) 国立公文書館デジタルアーカイブス<https://www.digital.archives.go.jp/>
  - (3) 川村博忠「正保肥前国絵図の作成経緯について」佐世保工専研究報告10所引
  - (4) 注1に同じ
  - (5) 松江市史編集委員会2014史料編11「絵図・地図」『松江市史』松江市
- [本稿作成にあたり、川村博忠氏より「正保城絵図」に関するご教示をいただいた。また、「松江城正保年間絵図」の撮影等で伊藤孝一氏、大矢幸雄氏にご協力いただいた。記して感謝いたします。]

(わだ よしひろ 米子工業高等専門学校名誉教授)

(いなた まこと 松江市歴史まちづくり部史料編纂課課長)

表1 「正保城絵図」の内、31天守の描写内容

	城絵図名称	北の方角	大きさ cm		内題位置	天守向き	天守の描写				
			左	右			規模	形式	外壁	意匠表現	
1	奥州白河城絵図	↓	364	246	右上	↗	三重	層塔型	複合式	板張、漆喰、隅柱	初・二重屋根に千鳥破風
2	上野国沼田城絵図	→	243	176	左下	↑	五重	層塔型	独立式	総漆喰	二・三・四重屋根に千鳥破風、五重に高欄
3	下総国古河城絵図	→	341	282	左下	↑	三重	層塔型	独立式	総漆喰	特になし
4	相模国小田原城絵図	→	291	310	一	↑	三重	層塔型	複合式	漆喰、隅柱	二・三重に高欄
5	越後国村上城之絵図	→	275	284	左中	↑	三重	層塔型	複合式?	総漆喰	二・三重屋根に千鳥破風
6	越後国古志郡之内長岡之図	→	271	207	右中	↑	三重	層塔型	独立式?	漆喰	特になし
7	越後国丸岡城之絵図	↓	181	190	左上	↑	三重	望楼型	独立式	漆喰、隅柱	三重目の腰に庇?
8	遠州掛川城絵図	←	251	336	左下	↓	三重	層塔型?	複合式	総漆喰	二重屋根に唐破風
9	三河国西尾城絵図	↖	226	234	左下	↓	三重	層塔型?	独立式	板張、漆喰	特になし
10	美濃国大垣城絵図	→	268	235	左下	↘	四重	層塔型	独立式?	総漆喰	初・二重屋根に千鳥破風、三重に高欄
11	近江国膳所城絵図	←	325	219	一	↑	四重	層塔型	複合式?	板張、漆喰	初・二・三重屋根に唐・千鳥破風
12	伊勢桑名城中之絵図	↓	255	281	一	↑	三重	層塔型	複合式?	総漆喰	特になし
13	丹波国福知山平山城絵図	↑	259	296	左下	←	三重	層塔型	独立式	総漆喰	特になし
14	丹波国龜山城絵図	↑	306	263	左下	←	三重	層塔型	独立式	板張、漆喰	二・三・四重屋根に千鳥・唐破風
15	和泉国岸和田城絵図	↘	321	243	右上	↑	五重	層塔型	独立式	漆喰	五重に高欄
16	美作国津山城絵図	↓	240	208	左下	←	五重	層塔型	独立式	漆喰、隅柱	二・三重屋根に入母屋・千鳥・唐破風
17	備前国岡山城絵図	↑	187	251	左下	↑	四重	望楼型?	複合式	漆喰	特になし
18	備中国松江城絵図	←	239	137	左下	↑	二重	層塔型?	複合式	総漆喰	特になし
19	備前国福山城絵図	↑	240	208	左下	↑	五重	層塔型?	複合式	総漆喰	初・二・三・三重屋根に千鳥・唐破風
20	安芸国広島城所絵図	↑	193	242	左下	↑	五重	層塔型	複合式	板張、漆喰	二・三重屋根に千鳥破風、五重に高欄
21	出雲国松江城絵図	↑	274	324	右上	→	五重	層塔型	連結式	板張り漆喰	初・二・三・四重屋根に千鳥・唐破風
22	讃岐国丸亀絵図	↓	217	255	右中下	→	三重	層塔型	独立式?	漆喰、隅柱	特になし
23	伊予国大洲之絵図	↓	264	215	左下	↑	三重	層塔型	独立式	板張、漆喰	初・二重屋根に千鳥破風
24	阿波国徳島城之図	↑	365	225	左下	↖	三重	層塔型	独立式?	漆喰、眞壁造	二重屋根に千鳥・唐破風
25	土佐国城絵図	↑	387	258	一	←	三重	望楼型	独立式?	総漆喰	初・二重屋根に入母屋・唐破風
26	豊前国小倉城絵図	↑	240	185	右上	↑	四重	層塔型	独立式	総漆喰	特になし
27	豊後国日出城絵図	↑	186	164	一	↑	三重	層塔型	複合式	漆喰、眞壁造	特になし
28	豊後之内臼杵城絵図	→	250	227	左下	↓	三重	層塔型	連結式?	総漆喰	初・二重屋根に千鳥破風
29	豊後府内城之絵図	↓	273	255	一	↓	四重	層塔型	複合式?	総漆喰	特になし
30	豊後国亘入郡岡城絵図	↖	179	280	左下	↓	三重	層塔型	独立式	総漆喰	初・二重屋根に千鳥破風
31	肥後国八代城廻絵図	←	206	274	一	↑	四重	層塔型	独立式?	総漆喰	特になし



①白河城天守



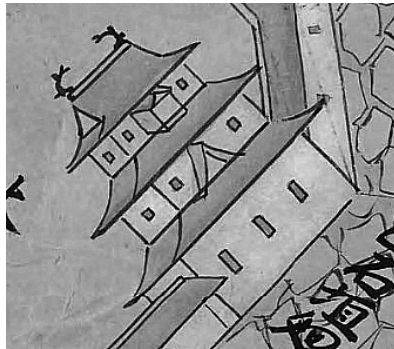
②沼田城天守



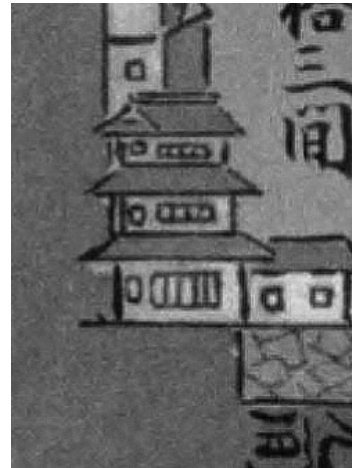
③古河城天守



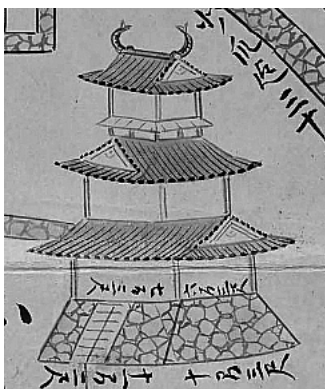
④小田原城天守



⑤村上城天守



⑥長岡城天守



⑦丸岡城天守



⑧掛川城天守



⑨西尾城天守

図1 「正保城絵図」の内、31天守の図 ①～⑨



⑩大垣城天守



⑪膳所城天守



⑫桑名城天守



⑬福知山城天守



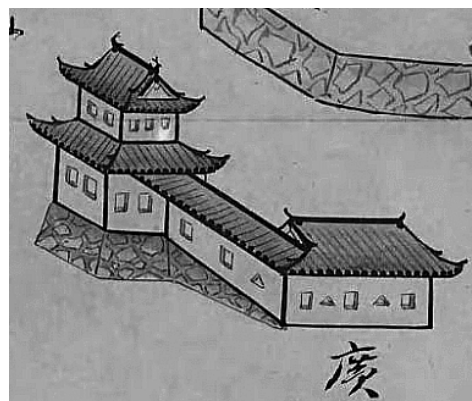
⑭亀山城天守



⑮岸和田城天守



⑯岡山城天守



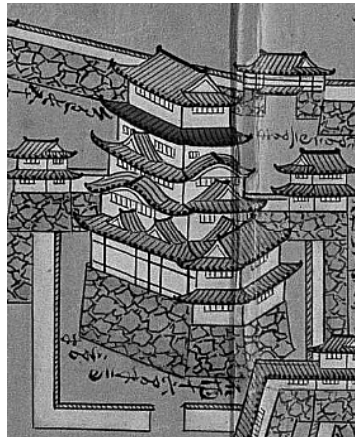
⑰備中松山城天守

図1 「正保城絵図」の内、31天守の図 ⑩～⑰

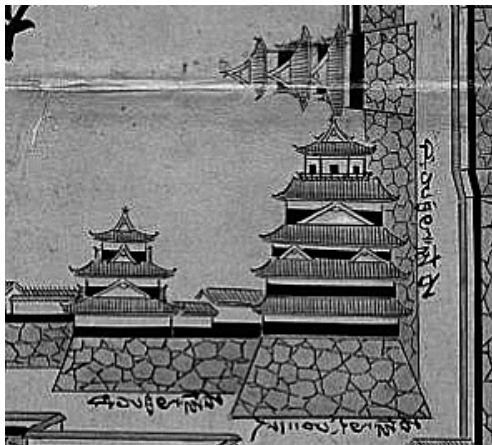




⑱津山城天守



⑲福山城天守



⑳広島城天守



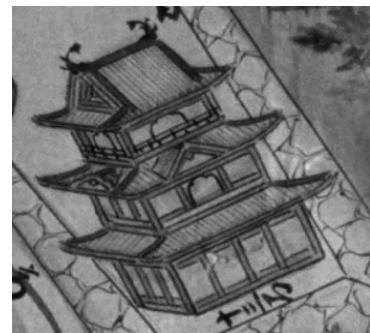
㉑松江城天守



㉒丸亀城天守



㉓伊予大洲城天守



㉔徳島城天守

図1 「正保城絵図」の内、31天守の図 ⑱～㉔



㊸土佐城天守



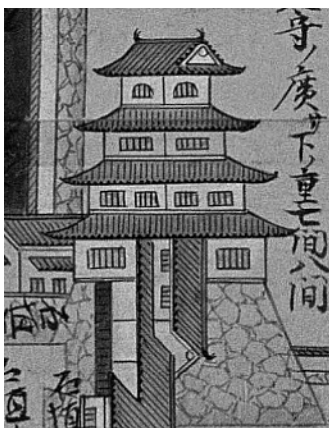
㊹小倉城天守



㊺日出城天守



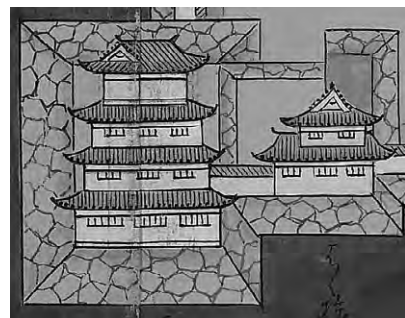
㊻臼杵城天守



㊼豊後府内城天守



㊽豊後岡城天守



㊾八代城天守

図1 「正保城絵図」の内、31天守の図 ㊸~㊾

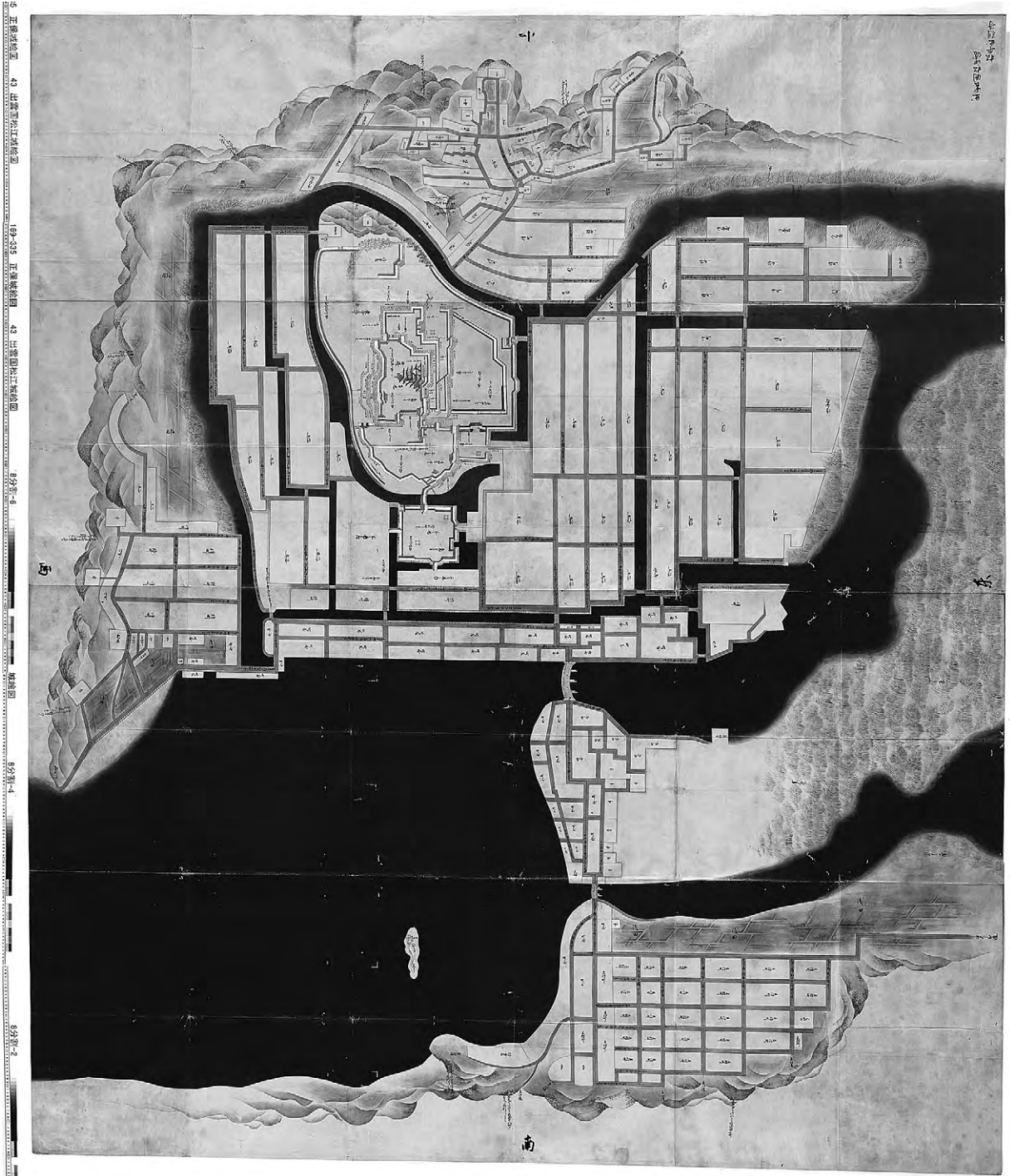


図 2 - 1 「出雲国松江城絵図」(「正保城絵図」の一、国立公文書館蔵)

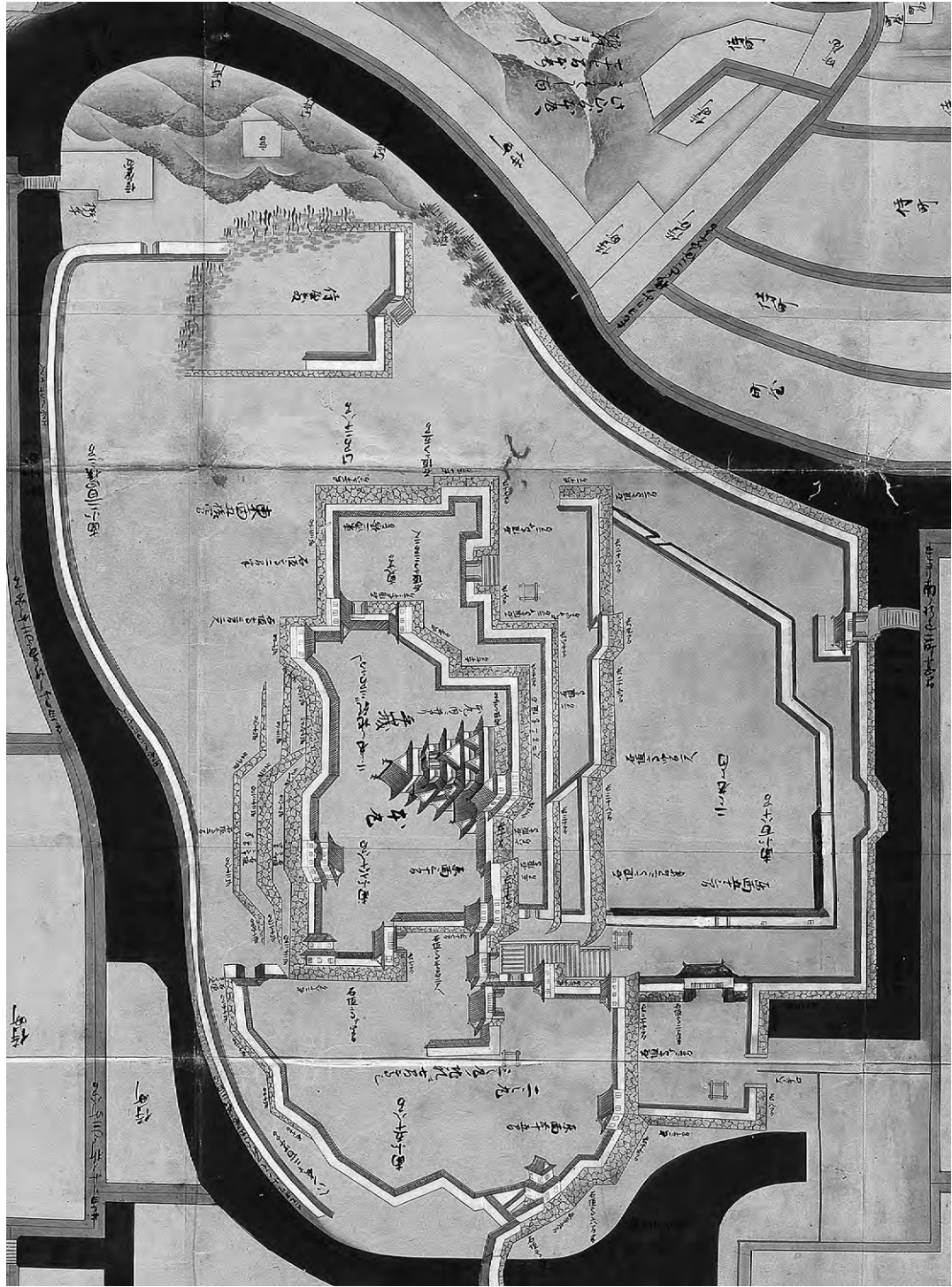


图 2-2 「出雲国松江城絵図」(城郭部分抜粋)

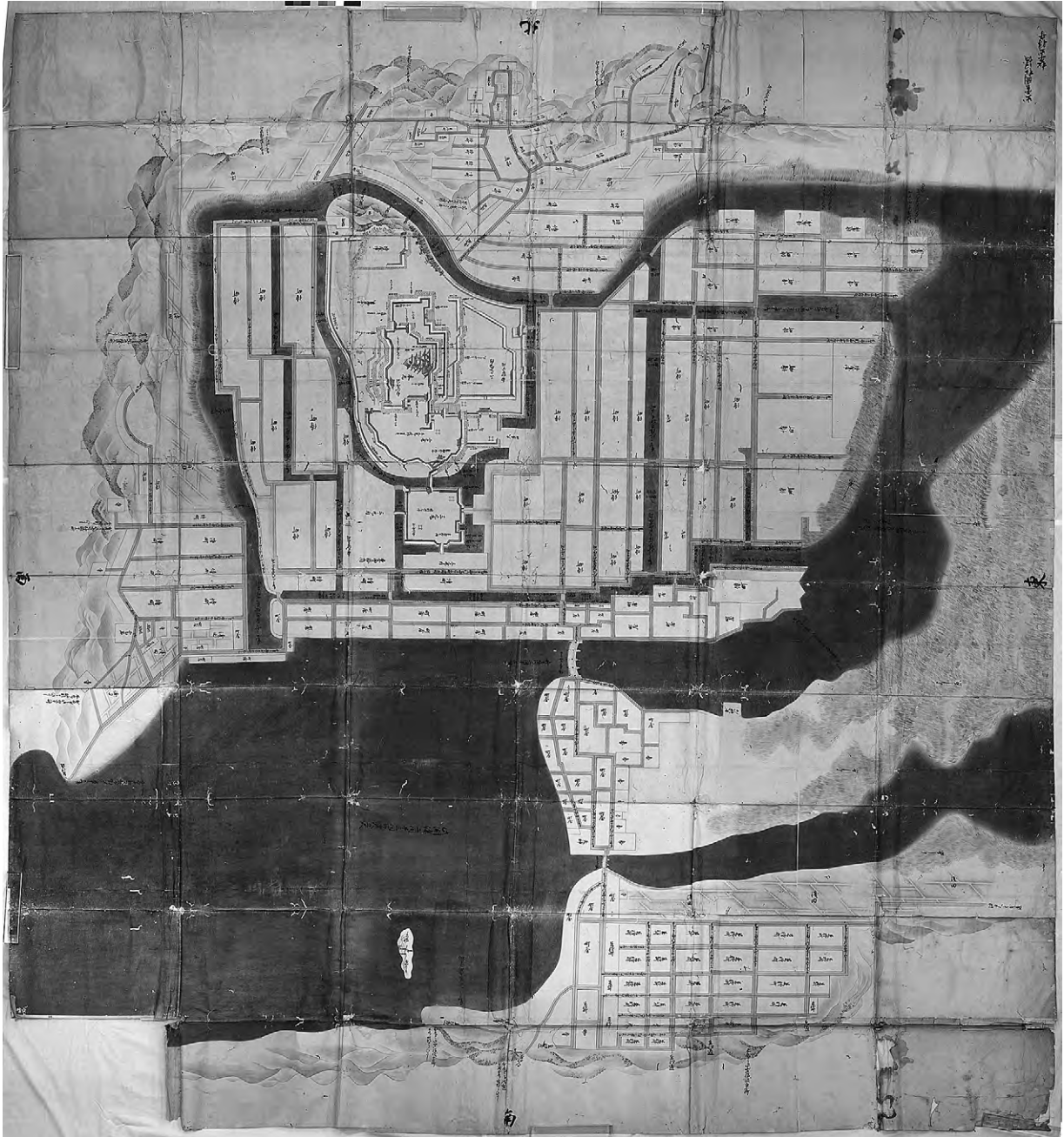


图 3-1 「松江城正保年間絵図」(松江歴史館蔵)

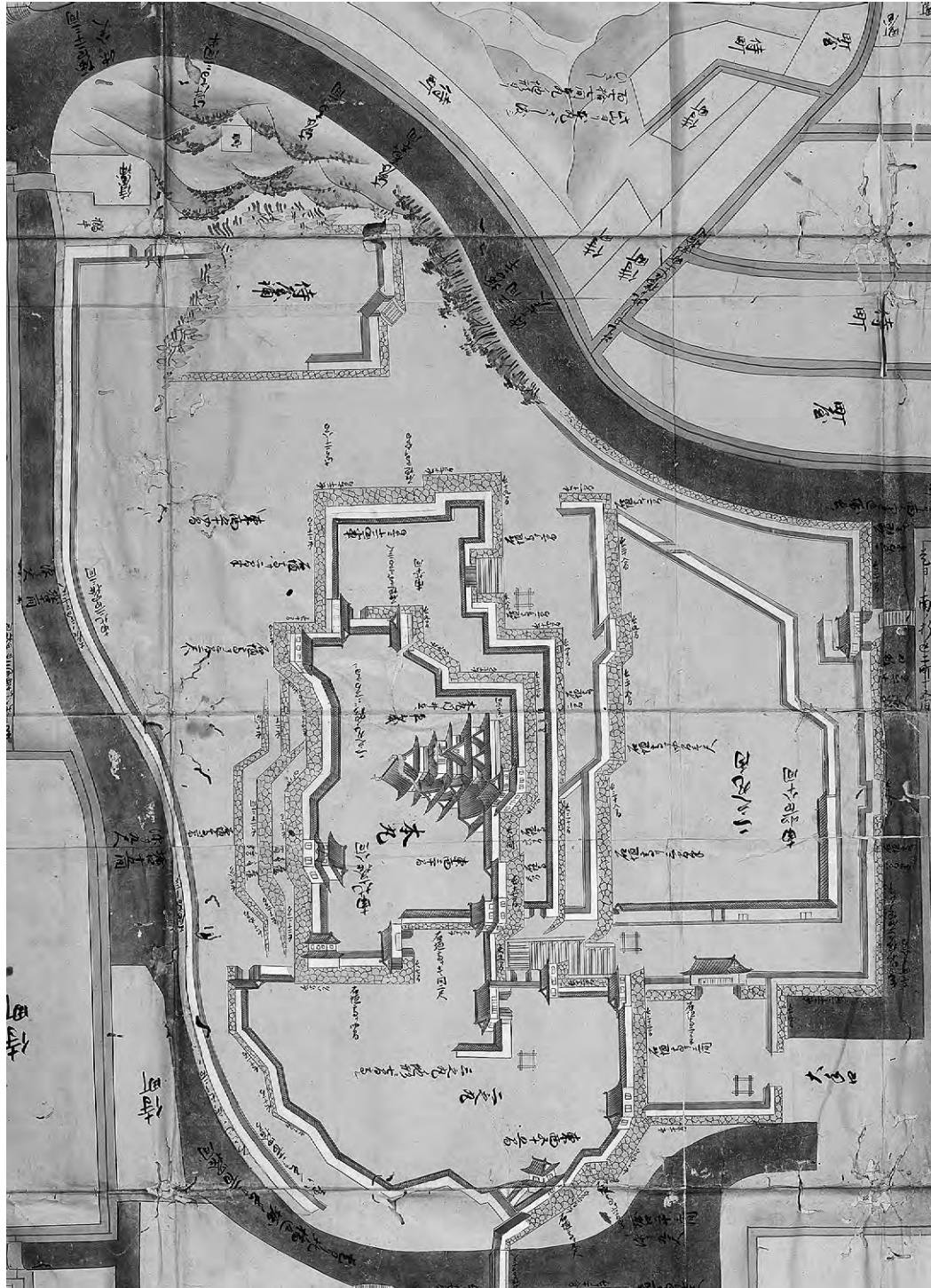


图 3-2 「松江城正保年間絵図」(城郭部分抜粋)